

あそ 11
2007



正平鐵筆



受 福
——
山田正平

あを

十一月



曼珠沙華

東京 佐藤喜孝

初秋へ骨をつかひてあゆみ入る
曼珠沙華よ>>>>とちゞみけり
くわんおんのかひなのながき萩月夜
てのひらの四角でありぬ新走
提燈の中も秋雨降りをりぬ

九月尽深くて思い立ちくらみ
闇雲の言動のあり秋の暮
生れ月息子嫁孫みな九月
南瓜煮て一人の昼餉烏龍茶
坂の家喘ぎ喘ぎの残暑かな

東京 安部里子

東京 遠藤 実

方言は生涯とれず棋檀の実
嫁して久し母ゆずりなる煮大根
しぐるるや候文の筆のあと
無遠慮に枝を伸して萩の道
錠剤を数へ今年も冬となる

烏瓜手にさげ山を降りて来る
ポケットのの木の実さぐれば家郷かな
秋茜クキクキととび高上り
幹打てば露の時雨となりにけり
花木槿一輪咲けばまた一輪

神奈川 鎌倉喜久恵

残されし者に何問ふ曼珠沙華
秋天の大丸窓や観覧車
敬老の日ながらへばこそ識ることも
権の実やおろそかならぬ百年後
七草の数に入らねど吾亦紅

神奈川

木村茂登子

金木犀

つつがなく母ふたりあり金木犀
姑ははとやっと裸のつきあひ十三夜
通院の姑と見つけし金木犀
通院を姑と楽しむ金木犀
姑を看て母想ふ日々秋の空

東京

斉藤裕子

秋の水収まってゆくヒステリー
根津の夜みこし見てゐる談志見る
川床や足を浸して少女めく
かつて龍馬ピストル撃ちし川涼し
鴨川の土手をあちやこちや秋暑し

東京 篠田純子

思ひ出しました忘れたる蓮は實に
ふと指のすすきの傷と氣づくまで
風害の虫の音までは及ばざる
戦争がうすく目をあげ曼珠沙華
仕合せのかけらまとめる夜の秋

東京 芝 尚子

東京 芝宮須磨子

戸を開けて名菓受けとる涼あらた
満月やこの世の有様不透明
満月に背をおされ行く句会場
唱名があこの世この世を秋彼岸
教材の黴なつかしき棚の奥

夜光虫詩となることばわき出でよ
秋風に驚く木菟は目を見はり
而してねむれる豚舎霧がつつむ
棒ぐひのささくれあたま秋まつり
十五夜の火の見櫓となりにけり

石川 定梶じょう

伊 予 路

埼玉 須賀敏子

「ホトトギス」発祥の碑に秋日照る
道後の湯漱石の間の秋めける
瀬戸の海雑魚釣りあげて天高し
面河溪水の青さに秋気満つ
青年はバイクで遍路秋初め

細き枝撓ふ石榴に足を止め
ひぐらしの白馬安曇野鳴き通す
ときどきは息を調へ秋の蝉
芋の葉の雨粒ためてひとつなり
無理をせぬ齡となりし秋ざくら

東京 鈴木多枝子

なにもかも雲散霧消せばと思ふ
秋口や豆腐の布目あきらかに
おほぜいで渡る花火の橋怖し
いま生まれし蟬と神社の森にゐる
甲斐の山雨後の白雲とり捲ける

埼玉 竹内弘子

とろろ汁

見て過ぐる秋果たのしき風の街
直立の向日葵の大いなる暗さ
駅頭に栗売る媪われを見る
亡き人を探す郡上の踊かな
とろろ汁信心うすく情の濃く

東京 田中藤穂

お嬢さん品書頂戴土用太郎
初雁やまんまんまるの子のおしり
赤烏賊は宝剣三宅の島光る
三光坂町会神輿調へり
秋祭法被も囃も嫌ひな子

東京 東 亜 未

虫しぐれ

風おこり闇押し寄せる虫しぐれ
虫の闇忍びに似たる歩きやう
夜の更けてラジオを止める虫しぐれ
月見寺木曾三川を眼下にす
月今宵近付いてゆく月見寺

三 重 長崎桂子

張翰の恋ひし鱸や夢の中
八月や異国の友と里帰り
道端のコスモス揺らぎ我を迎ふ
懐かしきコスモスの道国近し
故郷の山澄む時の帰郷かな

名古屋
西本春水

秋暑し身をもてあますペルシャ猫
病室にはるかかなたの稲びかり
今朝の秋診療室はしづかなり
石段の猫正坐せり虫の声
夕べにはそつと花閉づ蛍草

埼玉
早崎泰江

けいたいを持たぬが誇り梨をむく
背水の陣愈りのなく金木犀
冬園へ女ごころのさだまれり
枯れる園ひとり歩きは馴れてゐし
みち二つどつちにしやう返り花

東京 堀内一郎

曼珠沙華

ゆふづつの畦に灯ともす曼珠沙華
後戻り出来ぬ畦道曼珠沙華
落鮎の焼くるも樂し大蛇籠
これでもかこれでもと鳴く青松虫
秋草の五つを数へ園を去る

東京 森山のりこ

東京 森 理和

秋茄子嫁ぎ受け継ぐ塩の壺
みんみんやひとりぼつちのかくれんぼ
稲光ごろごろごろくろくろくレスシエンド
一匹の虫に呼ばれてをるやうな
ぬかご採るみちびく蔓は小豆色

北海道

東京 吉成美代子

夏雲の真下に展けオホーツク
音もなく白睡蓮に風渡る
ひと巡りして草いきれ五稜郭
ラベンダーまだ手に香る夏の宿
どこまでも真つ直ぐな道大夕焼

東京 吉弘恭子

太秦に鞍馬天狗や秋の風
麒麟の舌のびる背高泡立草
蚊にも秋一尺ほどの高みより
臉を過ぐ秋風のかろがろし
蒼穹のいろに染まりてゆく蜉蝣

老 残

埼玉 渡邊友七

老残の二字身にこたふ草雲雀
大仏の胎内蟬の声満てり
雨は霧に碑の面にすがる蟬の殻
愛に渴きこほろぎひとつ土間に鳴く
鰯雲一劃に墓地たまはりて

赤座典子

蒲焼に添ふ菊脰一つまみ
数珠玉や一瞬浮ぶ幼顔
名を問はむ携帯に在る秋の花
若きアバドの美しき勢ひ鶏頭花
齒の並ぶレントゲン写真秋彼岸

前号正誤

蕎麦食べて祭の町を後にせり
なかまへの読経にぎにぎ蟬時雨
面壁の達磨九年蟬七年

田中藤穂
東亜未

人句

魂まつり一升瓶と立膝と	佐藤喜孝
八朔や阿久悠硬派全うす	赤座典子
秋の雨夕餉のふたり寡黙なり	安部里子
さわさわと風揉み入れし萩の道	遠藤実
鮎を食ふ儀式のやうに箸つかひ	鎌倉喜久恵
合宿の灯の消えしあと誘蛾灯	木村茂登子
笑ひ声聞こえる写真水鉄砲	斉藤裕子
ホームレスに唾かけられる早道	篠田純子
さるすべり紅の一樹となりにけり	芝尚子
ことさらに紅茶芳し今朝の秋	芝宮須磨子
榛の木も遙かの嶺も終戦日	定梶じょう
熱熱に干されし梅を裏返す	須賀敏子



前月作品

敗戦日父泣く姿焼付いて	鈴木多枝子
和室に足まげて木の実をこぼしける	竹内弘子
蕎麦食べて祭の町を後にせり	田中藤穂
白壁に天為の蟬の止まりたり	東 亜未
九體佛慈愛くまなく萩の風	長崎桂子
炎天の電柱鴉不在なり	早崎泰江
赤とんぼ佐渡へ向ってつぎつぎに	堀内一郎
朝採りのモロコシ並ぶ道の駅	森山のりこ
首振つて顔這ふ蟻を守宮拒否	森 理和
七節虫の機敏に動く秋の夜	吉成美代子
斑猫や袋小路の将棋盤	吉弘恭子
銀やんまの瞳に戸隠が傾斜なす	渡邊友七

喜孝 抄



近世俳諧と漢詩文 巻

王岩

借王建一韻以五色賀新年

雪の麦はつ日に開く黒牡丹

野坡

野坡、志太氏。寛文二年（一六六二）〜元文五年（一七四〇）。江戸中期の俳人。俳諧ははじめ其角に学び、のち芭蕉に師事した。蕉門十哲の一人で、別号に野馬・浅茅生庵・高津野々翁などがあり、『野坡吟艸』を編んだ。問題の句はここに載せてある。

句前における「借王建一韻以五色賀新年」とは、「王建の一韻を借り、五色を以つて新年を賀す」という意味である。王建は中唐の詩人である。韓愈に学び、張籍と並んで、張王と称せられる。最も樂府に長じ、また宮中の事情に通じて、宮詞百首がある。蜀の花蕊夫人と宋の王珪の作をあわせた『三家宮詞』（明・毛晋編）がある。「王建一韻」とは、王建の一詩で、『三体詩』にも載る「宮詞」を指すと思われる。

金殿当頭紫閣重、
金殿 当頭 紫閣重なる

仙人掌上玉芙蓉。
仙人掌上 玉芙蓉

太平天子朝元日、
太平の天子 朝元の日

五色雲車駕六龍。
五色の雲車 六龍に駕す

起句は黄金の宮殿の上に紫色の高殿が重なる皇宮禁城の荘厳さを詠み、承句は宮殿の中にある承露盤（不老不死を得るために、天空より落ちる露を集める器具）の様子を描く。この承露盤は、銅の仙人が玉杯を捧げた形をし、漢の武帝が最初に作ったといわれる。転結句は太平の世の天子が玄元皇帝老子を拝する日に、五色の雲の模様を描いた車を龍のごとき六頭の駿馬にひかせて走ってゆく場面を髣髴させる。「朝元」とは、玄元皇帝すなわち老子を拝するの意味である。

句前の前書で示したように、野坡は王建「宮詞」を借り、五色を以って新年を祝賀しようとした。

瑞雪が麦畑に降り積もる。元日の朝日が赤く光る中で、黒牡丹は咲き誇っている。黒牡丹とは紫黒色の牡丹花で、雪の白、麦の黄、朝日の赤を加えると、ちょうど五色である。歳旦を祝う句として詠まれた。

因みに、貞門の員成という俳人は「花々や五色の雲の車坂」（『続山井』）を詠んだが、この俳諧の背後に王建の「五色雲車駕六龍」の影響は認められるではなからうか。

志し太た野や坡ぼ

長松が親の名で来る御慶かな
静さや梅の苔吸ふ秋の蜂
苗代や仁王のやうな足の跡
小夜しぐれとなりの白は挽やみぬ
頭布から耳とり出すや夜の音
秋もはや雁が下り揃ふ寒さかな
はき掃除してから椿散にけり
はつ雪にとなりを顔で教へけり
ほのぼのと鴉くろむや窓の春
雲霞どこまで行もおなじ事
寒きほど案じぬ夏の別れ哉
金屏の松の古さよ冬籠
子規顔の出されぬ格子哉
時雨るるや町屋の中の薬師堂
七種や粧ひしかけて切刻み
手まはしに朝の間涼し夏念仏
人聲の夜半を過る寒さ哉
朝霜や師の脛おもふゆきのくれ

猫の恋初手から鳴て哀也
八朔や浅黄小紋の新らしき
法度場の垣より内はすみれ哉
蜂まきをとれば若衆ぞ大根引
盆の月ねたかと門をたゝきけり
夕すゞみあぶなき石にのぼりけり
預けたるみそとりにやる向河岸
麥畑や出ぬけても猶麥の中
石臺を終にねこぎや唐がらし

むめがかにのつと日の出る山路かな 芭蕉

処々に雉子の啼きたつ 野坡

家普請を春のてすきにとり付て 野坡

魚に喰あくはまの雑水 芭蕉

千どり啼一夜一夜に寒うなり 野坡

子は裸父はててれで早苗舟 利牛

岸のいばらの真ツ白に咲 野坡

起承転結の法

定梶 じょう

文字にすればどちらも句意は同じである。が、耳で聞いた場合、果してだれもがこの文字を思い浮かべるかどうか。癒えは家になり、告ぐは継ぐと聞いてしまうかもしれない。俳句は目、耳どちらからも共通の意味にとれる言葉で、ということをおの句から学んだ。

以上の文章は、佐藤博美さんの『一語が及ぼす影響力』のタイトルで角川『俳句』誌に載せられたもの。「ごとく」が連体形に下接すること先月号で述べましたが、当然のことに鷹羽さんは「告ぐる」と添削した。告ぐが継ぐに聞こえる心配はこの時点で消滅するわけですが、なんとも複雑な誤解です。「癒え告ぐるごとく」が正用であり、「癒えを告ぐるごとく」が誤用であることに理解が至らない、このことは以

次の文章をお読み下さい。

まずは師鷹羽狩行の添削例から。

原句 癒えを告ぐるごとく北窓開きけり
添削 癒え告ぐるごとく北窓開きけり

下のように説明できると思います。口語では「告げない・告げて・告げる・告げる時・告げれば」のごとく活用します。対して文語では未然、連用は同形ですが以下は「告ぐ・告ぐる時・告ぐれば」の形で活用します。言い切る形の「告ぐ」は比較的安定を保ちますが、「告ぐる」「告ぐれ」は現代人にとり別の言葉のようにとられてしまふ、現代のことばから消滅しているに等しい、ということなのです。「酒に交ふ古本」「眺む冬木」としてしまふのも結局その辺にも事情がありそうです。文語が廃りつつある証なんでしょう。そして、言葉は変るべくして変ることを知っている国語学者は発言することを殆どしなないのです。

話をかえます。漢詩から出た「起承転結」という言葉は大概の文章読本にとりいれられていますし、現代でも大変有効な方法です。文章だけでなく詩や短歌でも同様でしょう。一方俳句は三つの句で成りたっていますので、少し離れているのでは、と思わ

れそうですが、実際には句作りのよい指針になります。そんなことを少し書いてみます。

夜は丸き雪粒舞ふよ紙相撲

佐怒賀正美

この句など典型的な起承そして転の句。

悪友や遠くで鳴らすラムネの玉

斎藤 玄

地雷説百の豆腐屋のあり

阿部完市

これらは転で始まっているのでしよう。

遺影を抱いて台風がそれてゆく

堀内 一郎

七五五の形。あるいは事実だけを述べた句かも知れませんが、その事実を上手に捉えなければ俳句にならない。鑑賞するにあり余る内容を含んでいます。

すつくと狐すつくと狐日に並ぶ

中村草田男

彼一語我一語秋深みかも

高浜虚子

お日様が山に腰かけ刈田道

芝宮須磨子

これらは起承結の句。須磨子さんのお日様がなんともやさしい。勿論句は複雑ですから、常にかたち截然としている、ということはありません。

ただの棒ならず榛の木春待つ田

高島 茂

この句など街住いの方には結句が取り合せのことはと見えるかもしれませんが。田舎住みの私にはなつかしい景で、枯れきっている畦木と荒涼とした田の面にいち早く春近しを感じとっている。それが「ただの棒ならず」であり「春待つ田」です。堀内さんの句と同様、転結のない起承だけの型。あるいは佐藤代表の句に

暮の秋ポストはいつも待つ姿

喜 孝

があります。歳時記には、風蕭々と吹く頃と説明されれている秋も末つ方、なるほどポストは待つしかな

い、人待ちがおに立っているしかないので。付会に過ぎたら困るのですが、この句の肝要は「待つ姿」。上が起であり以下が承。

秘密だったのに水仙が右向く

大坪重治

上五が起のことばに見えますが、「秘密だったのに」がこの句の眼目。多分このことばを抽きだすのに作者は時間をかけたはず。結が説明になったり転が自分の思う程飛躍していなかったり、ということは間々あります。そんな時にこれが転のことば、これが結のことばと認識することで思いのほか役に立つことがあります。そしてその上であとは読み手に委ねるしかありません。要するに、起承転結の法は、行きづまったときの逃げ道、と理解して利用して頂ければ、結構つかいがあるのです。

あをかき集

原爆の日
秋の湖

堀内一郎 選
(六人目以降五十音順)

新たななる核への不安原爆の日 芝 尚子
夏深し原爆の日の目裏に
叩かねば鳴らぬラジオよ原爆の日
湖近く涼風の中茶を喫す
赤松の林を抜けて秋の晝
猫舌の熱き茶を手に秋の晝



芝 尚子

原爆の心配は誰にも潜んでいる。破滅に繋がるからである。「核へ」は要らないかも。「目裏に」は今も新しい。

「赤松」「秋の晝」の踏韻がそれとなく利き、生きる力強さを滲ませている。

雲ゆくや原爆の日の鐘音す
田中藤穂

大本営ありし日原爆投下の日
開店のコンビニの混む秋の昼
立て込んで訃報の届く秋の昼
談笑の声高になる秋の昼
湖を行く船も混まざり夏の果
原爆忌遠い昔のことならず
安部里子

消したくて消えない記憶原爆忌
秋の昼スペイン広場に立つて居る
時差ボケのうつらうつらと秋の昼
秋の昼芦ノ湖渡る海賊船
漣の湖渡る秋の風
折り紙のすべて真四角原爆忌
遠藤実
終りから初まるドラマ原爆の日
原爆の日まだこれからや神風は
秋の湖ワイングラスの光かな

田中藤穂

大本営は私にとつても未だ身近かに。
戦後、米軍が入りパーシングハイツと
称した頃親父と仕事で暫く通った。戦後
終わらずの感。「コンビニ混む」せせこ
ましい世の中、心の貧しさを思う。

安部里子

原爆忌で通じるが、「原爆の日」が出
題なので忠実であるべき。「スペイン広
場」は海外旅行の所産が窺え、解放感が
伝わってくる。静寂の海賊船やや驚き、
わだかまりも残るが。

遠藤実

「真四角」は真面目さで「折り紙」は
薄命を感じる。忌々しい原爆を強調して
いる。「神風は」に平和への願望が込め
られる。私の家土曜日はコロツケの日。
「万歩計」は正確ひとを操る。

平和とはコロツケ二つ秋の昼
秋の昼融通きかぬ万歩計
原爆の日影の一際濃くありぬ

森 理和

原爆の日暈にごろりしてゐます
原爆の日結婚に踏み切らぬ友
婚約や何を着ませう秋の昼
秋の昼姑の座の射程距離
産直の野菜の香湖澄めり
六十余年原爆の日の終りなく
今日の気温明日の温度読む秋の昼
俵万智ふんふんと読む秋の昼
摩周湖の霧見し仲間一人欠く
盆の月ネス湖に怪獣住むといふ
書を閉ぢて原爆の日と思ひけり
原爆の日一本の棒喉にあり
原爆の日ゴミの袋を出してをり

鎌倉喜久恵

赤座典子

森 理和

「一際濃く」は昔日の忘れ得ぬ影で一瞬の惨景を思う。「ごろり」と平和の裏には起こってはならないの意もあるし、「結婚」はドラマ。「婚約や」「射程距離」と神経の遣い分けに楽しみも。

赤座典子

「終りなく」に絶望感。平和にはほど遠い。すると首相など変わっても致し方ないようだ。気温の“の”の細切れは否で、「ふんふん」は不要、「読む」で十分。

鎌倉喜久恵

「一本の棒」わだかまり、つかえは解る。確かに全世界を貫いている。原爆の日とて主婦の一日の生活に関係はない。生きて行く信念と底力ではある。

木村登茂子

湖の黒くうねりて無月かな
径ほそり湖の終りやダムに落つ
夏まつり一の鳥居を芦ノ湖に

箱根神社

木村茂登子

肅然と炎暑の兆し原爆の日
原爆の日形見といへる何もなし
原爆の日六十二年生き延びて
いそぐことなき身とはなり秋の昼

芝宮須磨子

八月六日ポツダム語りし暗き部屋
遠き日に息をひそめし原爆の日
秋の昼バス停の人無口なり
秋の昼コーヒー店に待ち合せ
子と会って語りつくせぬ秋の昼
湖にさざ波ひかり秋の昼

鈴木多枝子

湖に霧立ち渡り時鳥
鴉等も姿を見せず原爆の日
秋の昼浚漈船はギイツと鳴り

全国民黙祷。炎暑の静けさは不気味に
感じる。「形見」と問われて戸惑う。そ
れは自身が平穏だから。「いそぐことな
き身」気楽だが淋しいもの。

芝宮須磨子

戦中戦後暗い日々であった。「無口」
爽やかな季節に移ったが、一人ひとりは
孤独なのである。多くを語らぬが無口は
秋思である。子は娘では、一番頼りに。

鈴木多枝子

「秋の昼」心地の豊かさである。きめ
細かい心境の吐露とも思われる。鴉等は
不吉の象徴、原爆の日を更に不気味に。
「浚漈船」素朴な別世界を見せて一息。

篠田純子

「胎動」とは頼もしい。母子の情が伝
わる。こともあろうに原爆忌とは「生死

秋の昼後漑船に人見えず
原爆忌胎動ありと子のメール
名水を含む済まなさ原爆忌
篠田純子

熊蟬や原爆ドームの小さくなる
原爆忌アインシュタインが悪いのか
秋の昼カバンの隅に溜る闇
素麵を茹でて原爆の日の暮れる
須賀敏子

原爆の日過ぎて心に秋立ちぬ
正坐して針と糸持つ秋の昼
カーブミラー幾つか過ぎて秋の湖
秋興や知床五湖へ集ひたり
原爆の日テレビに向きて黙祷す
東亜未

新聞の克明な手記原爆忌
秋の昼母の兄との笑顔ふと
秋の昼孫の御襠褌のとれはじめ
富士五湖に山中ありし夏茶会

一如」とは良く言ったものだ。そして博士には罪は無い。カバンの「溜る闇」に社会の暗黒多岐な人間模様を想像。

須賀敏子

「秋立ちぬ」季節重複もあるが、けじめの後の安堵感が快い。「秋興」は過多、簡素が無難、「秋の昼」として罪無し。

東亜美

「テレビに向きて」中々出来ぬ仕草でめる。素直に思いをぶつける姿勢は見るものにとつては有難い。「御襠褌」微笑ましい景だが、のの“気になる。

長崎桂子

「眼に鼻に」は少々きついが、出来ている。「長く」は丈の長さか、長期間にもとれて意味は奥が深い。不況の町を通るたびに思う。

燈籠を流し原爆の日を祈る
長崎桂子

原爆の日人は宇宙に散りしまま
焦げ果てし原爆の日や眼に鼻に
ブラインド長く下すや秋の昼
白桃に一抔の紅宵の湖
空高く鳩飛び立てり原爆忌

早崎泰江

原爆の日子等は祈りの鐘を撞く
原爆の日子等に戦を語りつぐ
湖西線晩夏の湖を存分に
葉師寺の山門よぎる秋の昼
松虫草硫黄の臭ふ珈琲館

森山のりこ

秋の昼ゆらりゆらりと飛行船
湖の水面ゆるがす大花火
今も尚悪夢の如き原爆忌
忘れかけて又思ひ出す原爆忌
けたたまし蟬の声降る原爆忌

吉成美代子

早崎泰江

「鳩飛び立てり」平和を求めてやまぬ作者。「子等」へは後世への祈りであり願望そのもの。「湖」「山門」旅人になりきっている。表現は地味ながら風景にすぐ酔える、お人か。

森山のりこ

「硫黄の臭ふ」は草津か仙石原か、読者を旅に誘う。原爆の日は遣い難いらしい。それは原爆忌の方が座りが良いから。

吉成美代子

眼前の対象に素直である。装わぬところが却って新鮮に響くものである。ハムエッグ、サイクリングの明るさは得難い若さで羨ましい。

渡邊友七

これでもか、と強烈だが「原爆」のこ

竹節虫は小枝のごとし秋の昼
暮れてゆく湖のむこうに秋灯
秋の昼もう一品はハムエツグ
旅先のサイクリングや秋の昼
なぜなぜ死の果てにちり原爆の日

渡邊友七

原爆の殺傷三十万靈血の涙
遠き嶺呼ぶ妻の声秋の昼
湖照りに触れ夏の蝶傷み墜つ
月見草教会の鐘湖を越ゆ
秋の晝酔蓮は大きな音のする
鮎鮎やとほくから湖暮れはじむ
先生に出前がとどく秋の昼
かけがへのなきもの数ふ原爆忌
原爆の日町のすきまにビル建てり
秋の昼歩けるだけで幸せに
湖に遺りし句碑も秋の風

佐藤喜孝
竹内弘子

堀内一郎



本尊には勝てない。それだけ凄惨な原爆の重さでもある。後二句は対句にもなるようだ。深傷の夏蝶に教会の鐘が鳴る。

九月の句会

北条氏の岩室夏つぐむす猛る

弘子

傳句会

中野区 カフェ傳

あを吟行会

所沢航空公園

連句勉強会

毎月第1日曜

中野坂上

佐藤喜孝
(090-9828-4244)

夏負けの達者めかして歩きをり

弘子

倒れしを気づかぬごとしカンナ燃ゆ

敦子

夕昏れし向日葵の大きいなる暗さ

藤穂

みんみんやひとりぼつちのかくれんぼ

理和

戦争がうすく目をあげ曼珠沙華

尚子

表替して新涼の四畳半

茂登子

新涼の蠅も小さく見ゆるかな

恭子

CDに友の指あと秋微雨

純子

纏ふやう振捨てるやう風の盆

典子

芒原湖をへだててて神の庭

喜久恵

蛸がさらに寂しさかきたてる

寒林

目に沁みる汗に涙しかなしめり

泰江

地虫鳴く終着駅のひとつ前

喜孝

七座句会

中野区

小川苑

袋からノート鉛筆くぬぎの実

喜久恵

秋雨の遠の鴉は濡れぬのか

典子

秋の雨遠の鴉は濡れぬのか

恭子

手の中の手を撫でる秋微雨

理和

思ひ出したまた忘れゆく蓮は実

尚子

水の上歩く心算の太子杏

喜孝

点す家点さぬ家や秋の暮

寒林

ひらがなをくればもつるまじゆしやげ

木枯

亡き人を探す郡上の踊かな

藤穂

ひぐらしの白馬安曇野鳴き通す

多枝子

倒されし齒科の椅子の背曼珠沙華

夏子

太秦に鞍馬天狗や秋の風

恭子

初雁や真丸丸の孫の尻

東亜未

七座句会

毎月第4火曜

小川苑

吉弘恭子
(090-9839-3943)

あを吟行会

未定

(一月)

調句会

さいたま市岸町公民館

大仏の胎内満たす蝉の声

友七

月代や牛骨白き美術室

敦子

秋草の濃きむらさきや染み透る

恵子

かたりともせざる隣室秋半ば

綾子

石段の猫正坐せり虫の闇

泰江

あを林檎

十二月第3日曜

白金台福祉会館B室

東亜未 (346-2770)

調句会

毎月第3金曜

岸町公民館

竹内弘子
(0488-86-3501)

傳句会

毎月第2火曜

カフェ傳 森理和
(03-3368-4263)



先月号は遅れをとりもどさんと前のめりになり過ぎ誤植を多く出してしまひました。申し訳ございませんでした。



今月から王岩さんの「近世俳諧と漢詩文」の連載がはじまります。今号は志太野坡。次号は森川許六、そして夏目成美と続きます。同時代の俳句を読むのは勿論ですが、もし古い時代の發句を読まれる機会が少ない方は、(私もさうですが)これを機に讀まれることをおすすめします。古い時代と氣輕に書きましたが、讀んでゐる内に時間の隔りがなくなつてゆくはずで、時代の違ふ小説の読書中はその時代にすつぽりはいつてしまふことを経験なされたことが誰にもおありかとおもひます。その号にとりあげる俳人の發句・付け句を私が一頁にまとめてみました。分らない言葉は辞書をひいて讀んで下さい。王岩さんの文を讀むと、芭蕉・蕪村に限らず江戸時代の人がこんな深く漢文・漢詩から影響を受けてゐることにあらためておどろきます。

「蕪村漢訳」の読者の方には誠に申訳ございませんが



しばらく休載します。

「あをかき集」は、弘子・一郎兩選者と投句者のお蔭で順調に育つてきたとおもひます。いままでは季語の勉強をかねて兼題で作句していただきましたが、年が改まりましたら「雑詠」といたします。自由な發想でお作り下さい。ますます「あをかき集」が充実して行くことをねがつておます。

「九月号作品集鑑賞」は都合により来月号に掲載いたします。(喜孝)

二〇〇七年十一月号

発行日 十月十九日
 発行所 東京都中野区中央2,50,3
 電話 090-99828-4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹徳房
 カット/恩田秋夫・松村美智子

郵便振替 00130-6-55526 (あを發行所)
 会費 一〇〇〇〇円 (送料共) / 一年
 表紙・佐藤喜孝

乱丁・落丁お取替えます。